

みね　こ　の  
峰　古　野　1　号　墳

配水管布設工事に伴う発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

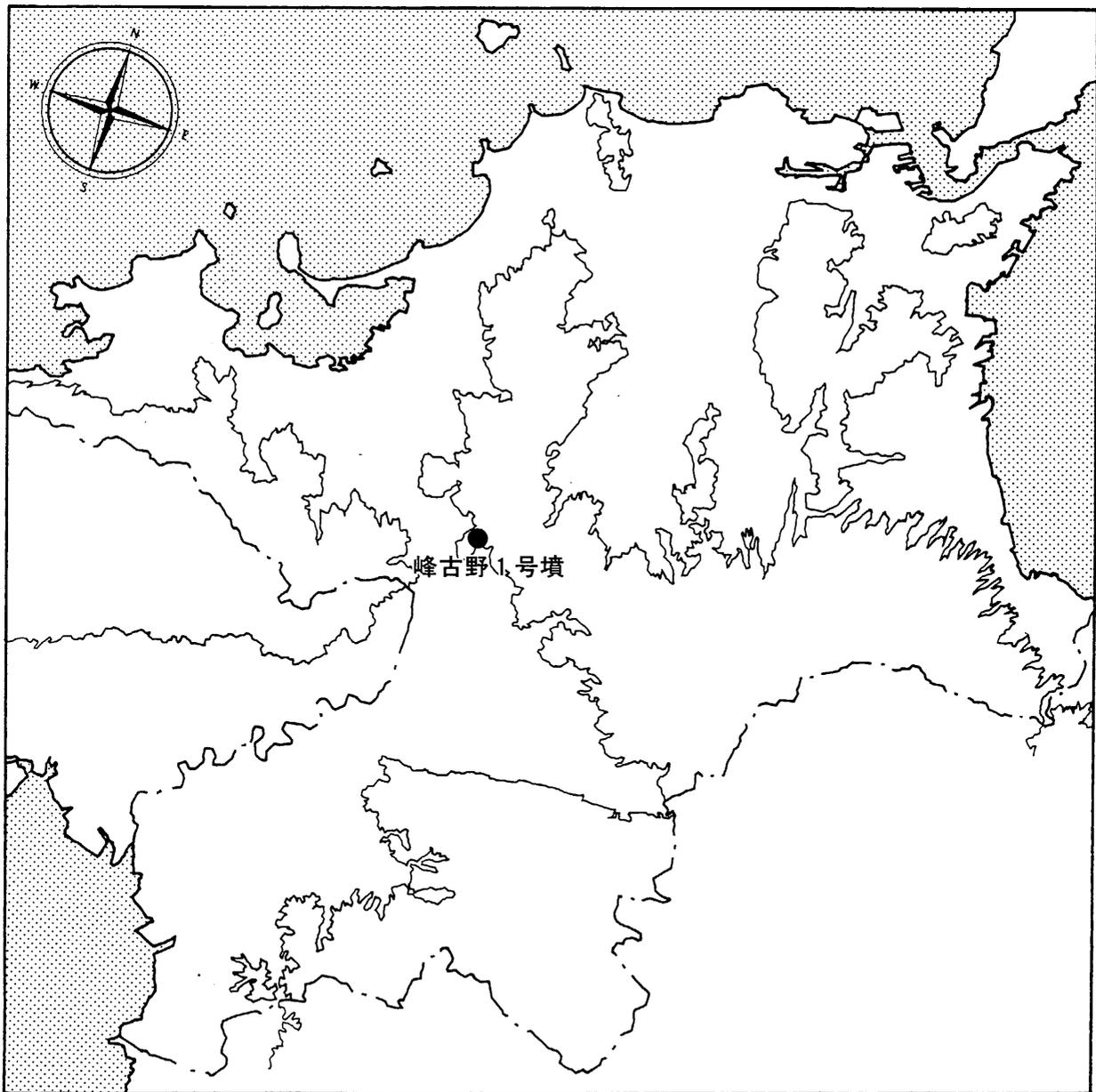
第70集

2002

筑紫野市教育委員会

# 峰古野 1 号墳

配水管布設工事に伴う発掘調査



# 例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が平成8年度から9年度に実施した配水管布設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は、筑紫野市水道局（現筑紫野市上下水道部）から協議を受けて筑紫野市教育委員会・社会教育課（現文化課）文化財担当が実施した。
3. 調査に係る遺構実測ならびに個別写真撮影は、渡邊和子が行った。
4. 本書掲載の遺物の実測は渡邊が行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートに委託した。
5. 遺物写真の撮影については、フォトハウスOKAに委託した。
6. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
7. 報告書掲載の図版の製図は、（有）文化財テクノアシストに委託した。
8. 挿図中に使用した方位は、国土調査法Ⅱ座標系を基準としたが、一部磁北を使用した。
9. 遺物の復元および整理作業には、浅谷芳江・加藤美智子・高木保子・松尾敦子・百田愛子・山内妙子が従事した。
10. 本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

## 目 次

	本文	頁		頁
	1. 調査に至る経過	2		
	2. 調査の組織と構成	2		
	3. 位置と環境	3		
	4. 調査の概要	4		
	5. 峰古野1号墳の位置と環境	17		
	6. まとめ	25		
挿図 (Fig)		頁		頁
Fig. 1	周辺の古墳分布図 (S1/25,000)	1	Fig. 14	1号墳現況図 (S1/50) 折り込み
Fig. 2	B・C区間土層模式図	4	Fig. 15	1号墳実測図 (S1/40) 20
Fig. 3	A区土層模式図	5	Fig. 16	閉塞部および石室内面掘方図 (S1/40) 21
Fig. 4	平成8年度C区工事立会範囲図 (S1/2,500)	6	Fig. 17	出土遺物実測図 (S1/3) 25
Fig. 5	平成8年度A区工事立会範囲図 (S1/2,500)	7		
Fig. 6	平成9年度事前調査範囲図 (S1/2,500)	8	図版 (PL.)	
Fig. 7	H・D区間遺構配置図 (S1/40)	9	PL. 1	各区現況写真 11
Fig. 8	C・D区間遺構配置図 (S1/40)	12	PL. 2	出土遺物 16
Fig. 9	G・A区間遺構配置図 (S1/40)	13	PL. 3	石室全景 18
Fig. 10	A・E区間遺構配置図 (S1/40)	14	PL. 4	石室近景 22
Fig. 11	K区間遺構配置図および遺構断面図(S1/40)	15	PL. 5	石室近景 23
Fig. 12	出土遺物実測図 (S1/3)	16	PL. 6	石室近景 24
Fig. 13	峰古野1号墳位置図 (S1/5,000)	17	PL. 7	出土遺物 25

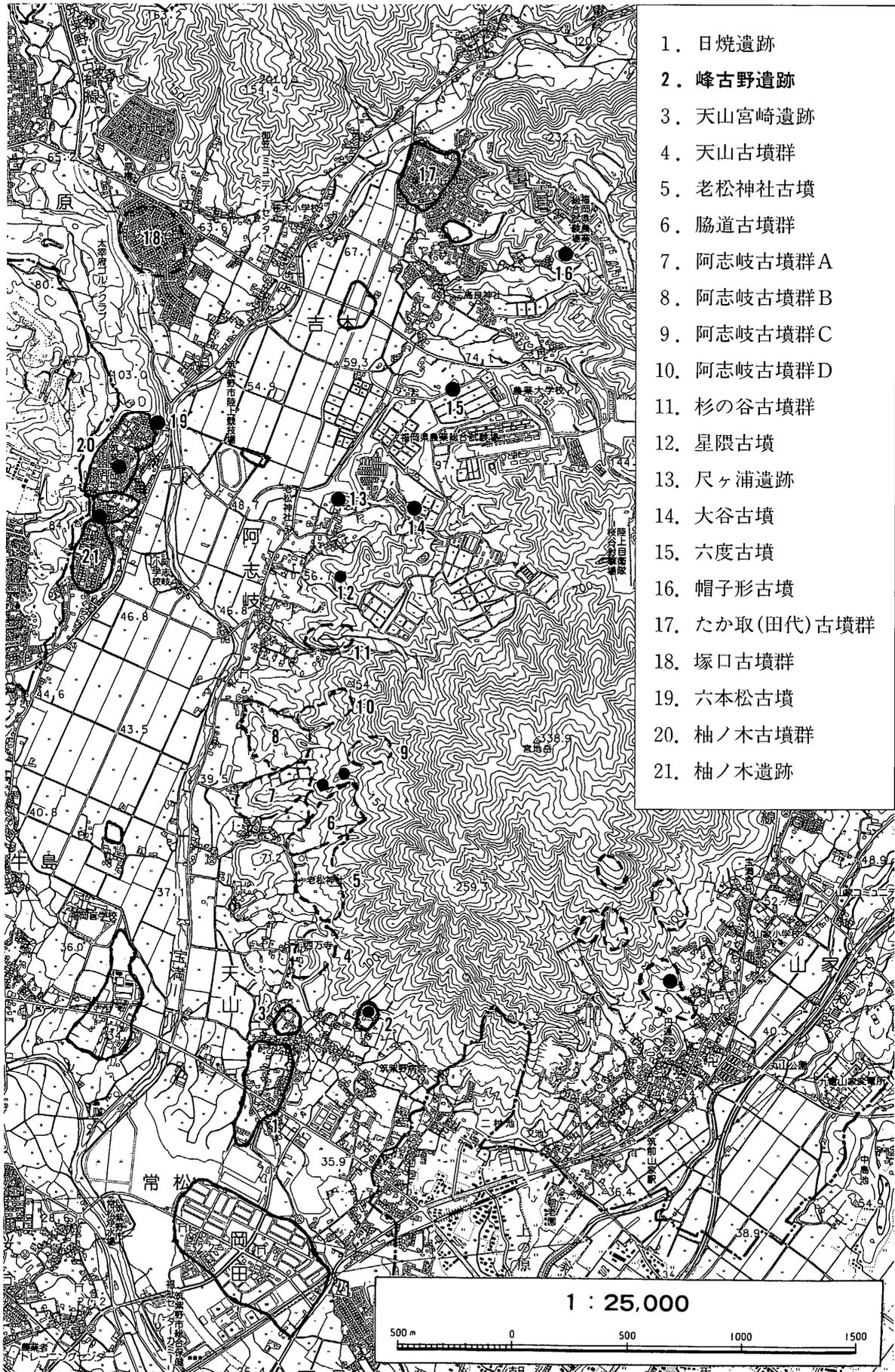


Fig. 1 周辺の古墳分布図 (S1/25,000)

# 1. 調査に至る経過

市教育委員会・文化財担当では平成6年度以前の水道および道路建設等の小規模の公共事業については、文化財保護法の第57条3項の提出と工事立会するだけで工事に先行した確認調査などについては着手できずにいた。

平成8年度より、これらの調査の不備を解消するために複数体制にし、手薄であったこれらの調査に改めて着手することとした。しかしながら1名は従前どおり発掘調査に従事することが多く完全な体制の整備にはなり得なかった。このような状況のなかで当年には周知の遺跡内の日焼遺跡一帯に配水管布設の工事計画が決定され、現地の遺跡遺存状況を把握することなく工事立会することで上下水道部と事前協議がなされ確認調査を着手することとなった。

翌9年度には、峰古野遺跡一帯の配水管布設計画があがったが、このあたりは遺跡の遺存状況が良いと判断したため、工事立会ではなく工事に先行して本調査を実施することで協議を行なった。

本調査については、地元・水道局上下水道担当・文化財担当と協議を重ねた結果、①午前9時から掘削を開始すること。②午後5時までには埋めもどしまで完了させること。③配水管布設工事工程に合わせ工事着手2日前に調査を実施すること。④日曜日には絶対に調査・工事を実施しない。で地元の承諾を受け確認調査を実施した。

調査開始と同時に未確認の古墳を検出し、改めて配水管布設位置の変更について上下水道担当と協議したが、将来的には下水道管の布設や道路整備の計画もあるとのことで現状保存は不可能と判断し、全域の調査完了後にあらためて古墳の調査を行うことで協議を終えた。

古墳の調査は、平成9年11月5日より開始し11月20日に完了、完了後現地において地元説明会を実施した。

# 2. 調査の組織と構成

総括	教育長	永 淵 正 敏
	〃	高 嶋 正 武 (現任)
	教育部長	永 田 晋 一
	〃	岡 部 隆 允 (現任)
庶務	社会教育課課長	岡 部 隆 允
	文化課課長	田 中 哲 也 (現任)
	文化財担当係長	森 實 秀 美
	課長補佐兼係長	古 賀 幸 信 (現任)
	臨時職員	中 富 貴代美
	〃	西 村 真 美 (現任)
事前審査	主査	長 野 卓 司 (平成8・9年度)
	技師	渡 邊 和 子 (平成8・9年度)
発掘調査	〃	〃
整理報告	〃	〃

### 3. 位置と環境

筑紫野市は西側に脊振山塊、北東部には三郡山塊が迫り、その間に挟長な平野を形成している。その平野は北西に福岡平野を南に筑後平野を望み古代から交通の要衝となっていた所でもある。

筑紫野市内の北西には御笠川と合流して博多湾に注ぐ鷺田川があり、また東側には筑後川に合流し有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川は三郡山を源とし、その東麓を回りこむように流れ、吉木・阿志岐の平野を潤しながら永岡付近で九千部山に源をもつ山口川と合流する。

吉木・阿志岐の東側には宮地岳（標高338.9m）があって、その東・西山麓部には数多くの古墳が群集し、それぞれの古墳群を形成している。

峰古野遺跡ならびに峰古野1号墳は宮地岳（標高338.9m）の南麓、標高54～73mに所在する。

調査地点の周辺域は、昭和45年（1970）に荒造成がなされ現在月光苑団地となっていてその宅地の一画から縄文時代早期の押型文土器が出土し、峰古野遺跡として周知の遺跡に登録されていたが古墳の所在は確認されていなかった。

この宮地岳西麓地域では、これまでたか取古墳群（田代古墳群）、杉の谷古墳群1～3号墳（註1）、阿志岐古墳群A群3号墳の初期横穴式石室（註2）などや、阿志岐古墳群B群21～25号墳の割竹形木棺を主体部にもつものなど（註3）や老松神社古墳（註4）などの発掘調査がなされ、この周辺域での横穴式石室、竪穴系横口式石室、割竹形木棺を内部主体部にもつ古墳の所在が、僅かずつではあるが明らかになってきている。

これらの古墳群に対峙するように、宝満川を挟んで宮地岳対岸に高尾山から派生した丘陵が連なり、丘陵上には弥生時代に起源をもつ墳丘墓が造営されている。内部主体が割竹形木棺で方格規矩鏡を出土した菖蒲浦1号墳や方形・円形周溝墓の並列する峠山遺跡（註5）などが確認されていて、宝満川を挟んで東西に位置する、これらの古墳群は小地域に台頭した有力世帯共同体の世帯主が首長級へと成長していった過程を示すものとして注目されている。

このように宮地岳の西麓付近は、宝満川中流域の沖積平野を生産基盤とする古代家族集団の墓地の営まれた所であり、興味深い場所でもある。

宮地岳西麓の各々の古墳群の所在する地形は、宮地岳山頂から八っ手状に延びた山陵の尾根上や斜面部に古墳が構築されて分立し、各々がグループを構成すると考えられていて、分立したグループが家族的つながりをもつか否かは、今後の課題でもある。

なお今回調査した峰古野1号墳は老松神社古墳より東南2.3kmに位置して宮地岳の南麓に所在し、宮地岳南麓部で初めて確認された古墳で、標高70～73mに位置する。1号墳の位置する丘陵部は宮地岳の山頂部より派生した非常に緩やかな山陵斜面部に所在する。東・西側は小さな谷に面し宮地岳西麓部に所在する各々のグループの古墳群とは明らかに分立している。

註1 杉の谷古墳群・カケ塚古墳埋蔵文化財調査報告書 筑紫野市文化財調査報告書第2・3集 1979 筑紫野市教育委員会

註2 阿志岐シメノグチ遺跡 筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972 筑紫野市教育委員会

註3 阿志岐古墳群（阿志岐古墳群B群21～25号墳の調査）筑紫野市文化財調査報告書第7集 1982 筑紫野市教育委員会

註4 老松神社古墳 筑紫野市文化財調査報告書 第50集 2002 筑紫野市教育委員会

註5 峠山遺跡 福岡県文化財調査報告書 第51集 福岡県教育委員会

## 4. 調査の概要

平成8年度以前の配水管布設工事は、工事予定区が市街化の中心部であったために周知の遺跡内にあっても遺構は削平されていることが多く、工事立会で層序の確認と旧地形を想定するだけに止まっていた。

平成8年度後半に当年度の工事予定計画が上水道担当よりあり事前協議を実施した。

工事区はA・B・Cの3区間に分割されA区には天山宮崎遺跡、B区では旧日田街道、C区には日焼遺跡などが含まれる事が分かり工事立会を実施した。工事の全工程の立会を行う事ができず、工事予定範囲内をポイントでしか確認することができなかった。そのために遺跡の範囲などの詳細については当該年度は、把握することができなかった。

B区の全体の土層図からは、道路路床部分が25～30cm、その下に基盤層があるのが基本層序となり、B-1・6～9・12・15・18がこの範疇にあることが読みとれるが、遺構の所在する面が残っているのはB-6付近であり、B-6以外は遺構面がかなり削平を受けていると理解される。

またB-2・3・4・10・14・16には路床と地山の間に10cmほどの硬化面が記入してあるが、これらが旧日田街道に伴う路床なのか否かは土層図からも写真からも確認することはできない。調査担当者と協議したが明確な判断ができなかった。

さらに旧地形が窪地に当たるのか地山の上に客土を積み上げて路床を形成させたB-13・17付近などあって、周辺の旧地形に凹凸のあったことを想定させる。

C区では路床の下に地山の堆積があるのが基本層序として理解される。ただし地山自体もローム層の堆積するC-4・5・12・14・17と砂礫の堆積した地山C-3・13・16に分けられる。これらのうちC-5付近だけが遺構の所在するローム面が確認されているが遺構は検出できていない。他のC-1・2・12は、B区間と同様に遺構面があるローム層が削平されている。さらにC-3・13・16ではローム層が砂礫層まで削平を受けたのか、もしくはローム層の堆積は当初よりなかったのか現段階での判別は難しいと考えられる。

C-6・8・9・15における堆積のあり方は、旧地形が他の箇所比べて深かったのか窪地状の

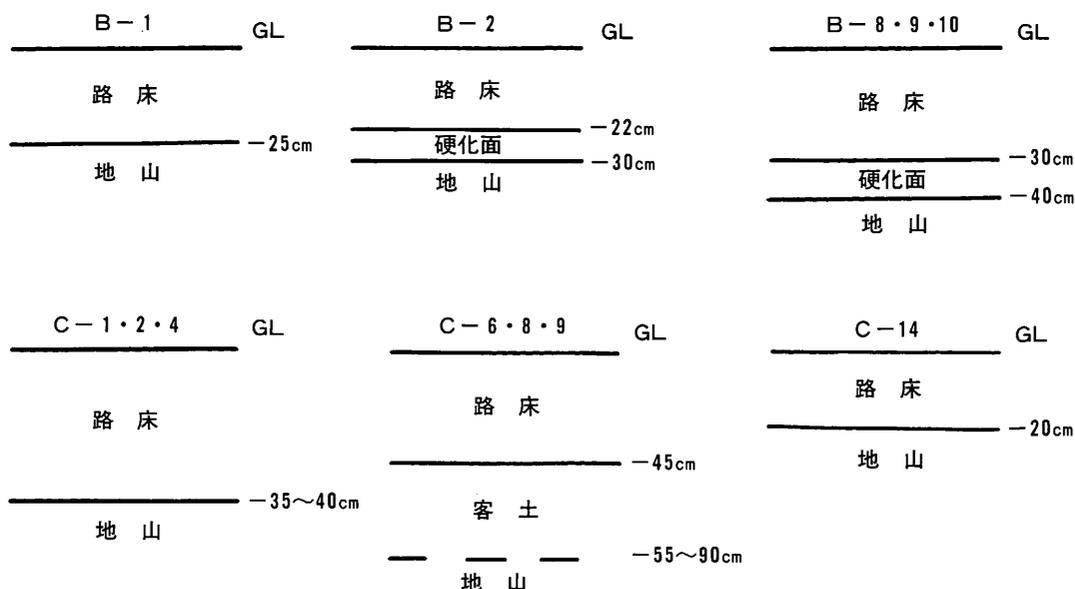


Fig. 2 B・C区間土層模式図

ものが所在したのか地山の上に多量の客土を積み上げて路床を形成させている。

A区間の層序の確認は、日焼遺跡の中心部にあたり詳細な観察が必要な所であったが、現状では図面からも写真からも容易に把握することはできない。

基本層序は、道路路床の下に火山灰質の黑色粘質土が堆積したもので、この黑色粘質土も地山であると判断できる。これらは周辺域の試掘・立会調査・道路建設に伴う調査において確認されている地山と同様な堆積層で、その層から遺構が切り込まれている事は推察できる。

土層図の作成された箇所A-1～5・7～9・11～15の地点に、この層序が認められることから周辺域の遺構の遺存状況は非常に良好であると想定される。

土層図の所見によれば、A-2に幅60cmの断面U字状の遺構が所在している。しかしながらこの遺構の種類および検出面の深さ、遺構の方位、広がり、この図面からも写真からも判別できない。A-6の土層図からは、遺構をのせる層の黑色粘質土が削平されてローム層が路床直下に存在している。ここの地形図を見ると丘陵が削平されて道路が作られていることが分かるとともに北側に残る高台に近い高さの丘陵の続きであった可能性もある。

A-10で図示された土層図では、遺構の切り込む黑色粘質土が削平されていて、ここにも幅40cmと幅120cmの断面U字状の遺構が2つ図示されているが、A-10がどこに位置するか不明のため遺構の広がりなどおさえることは難しい。それとともにA-2の遺構と同様に遺構の検出面の深さやの詳細を把握することはできない。また両者の遺構についての検出面の高さの違いや新旧関係などについても担当者と協議をしたが不明である。

これらの図示された遺構が溝状遺構とすると発掘調査(註1)のなされた地点や試掘調査の所見に一致して集落の周囲に溝が多く巡っている可能性も考えられる。

註1 日焼遺跡 筑紫野市文化財調査報告書 第20集 1989 筑紫野市教育委員会

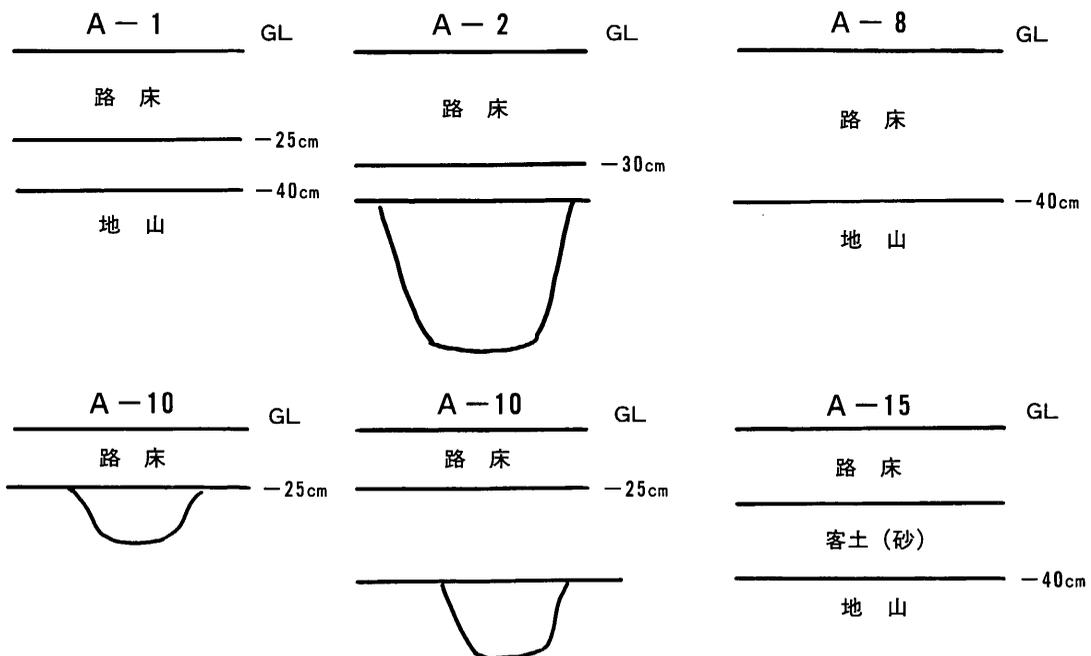


Fig. 3 A区土層模式図

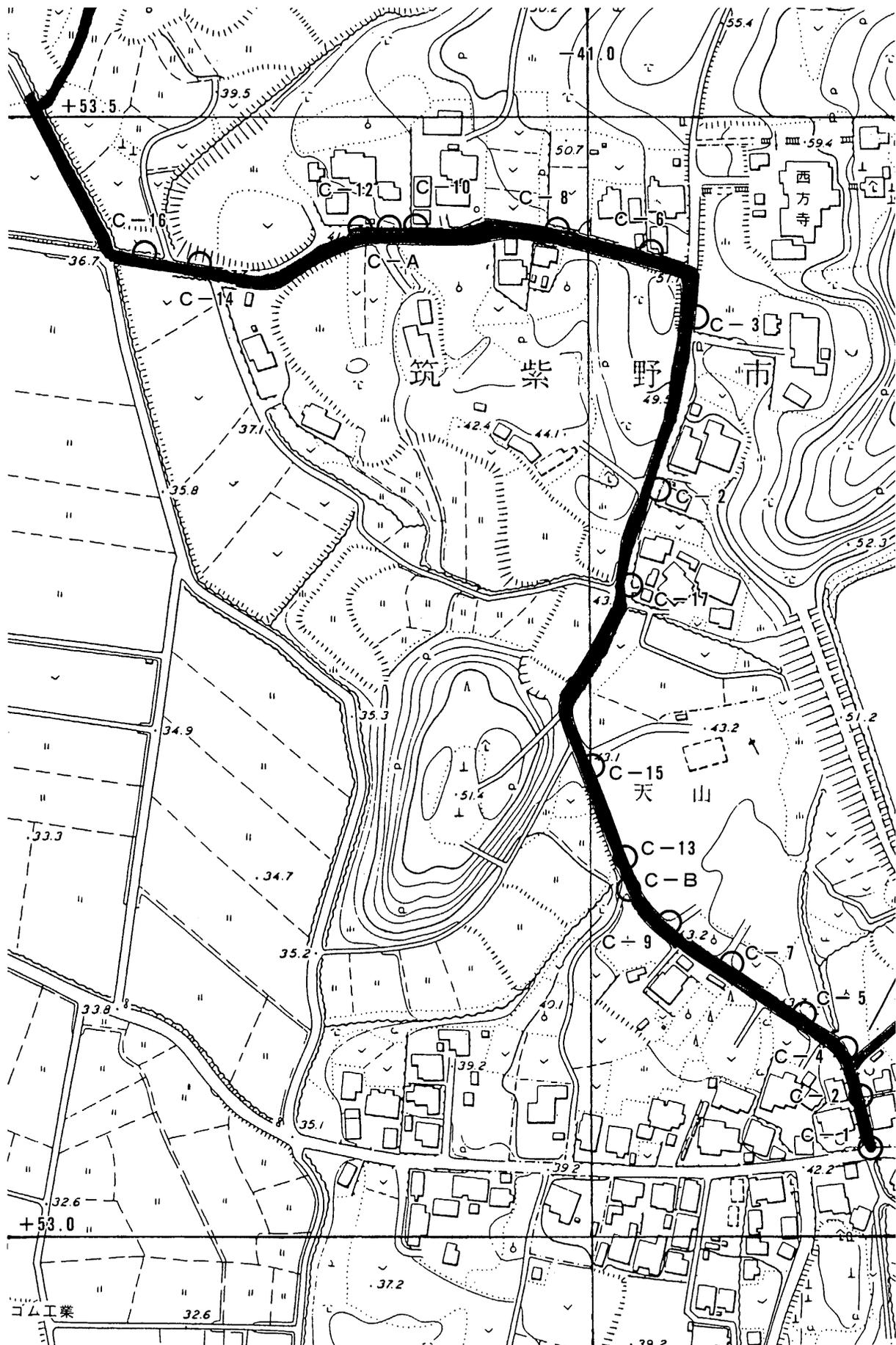


Fig. 4 平成8年度C区工事立会範囲図 (S1/2,500)

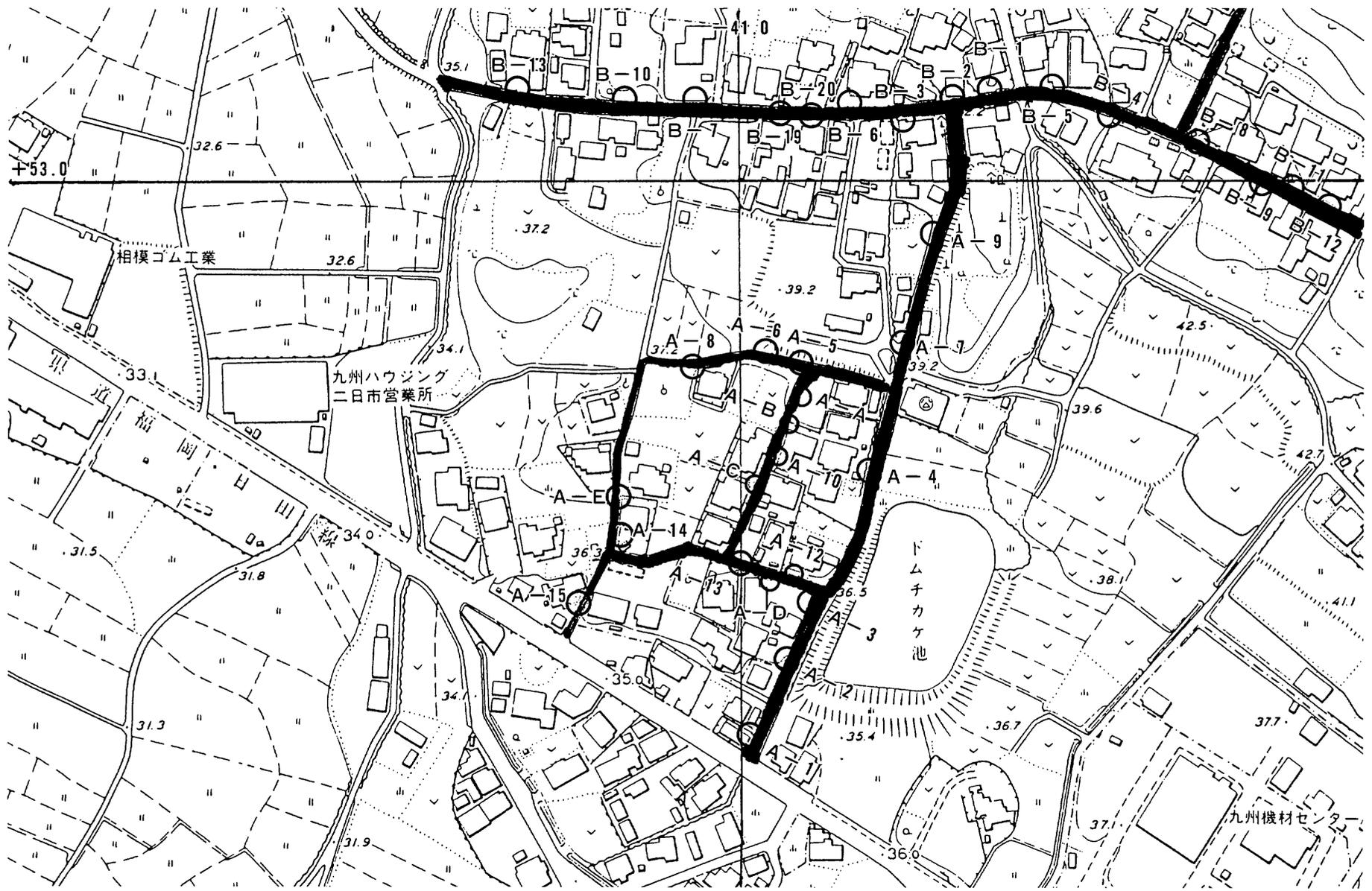


Fig. 5 平成8年度A区工事立会範囲図 (S1/2,500)

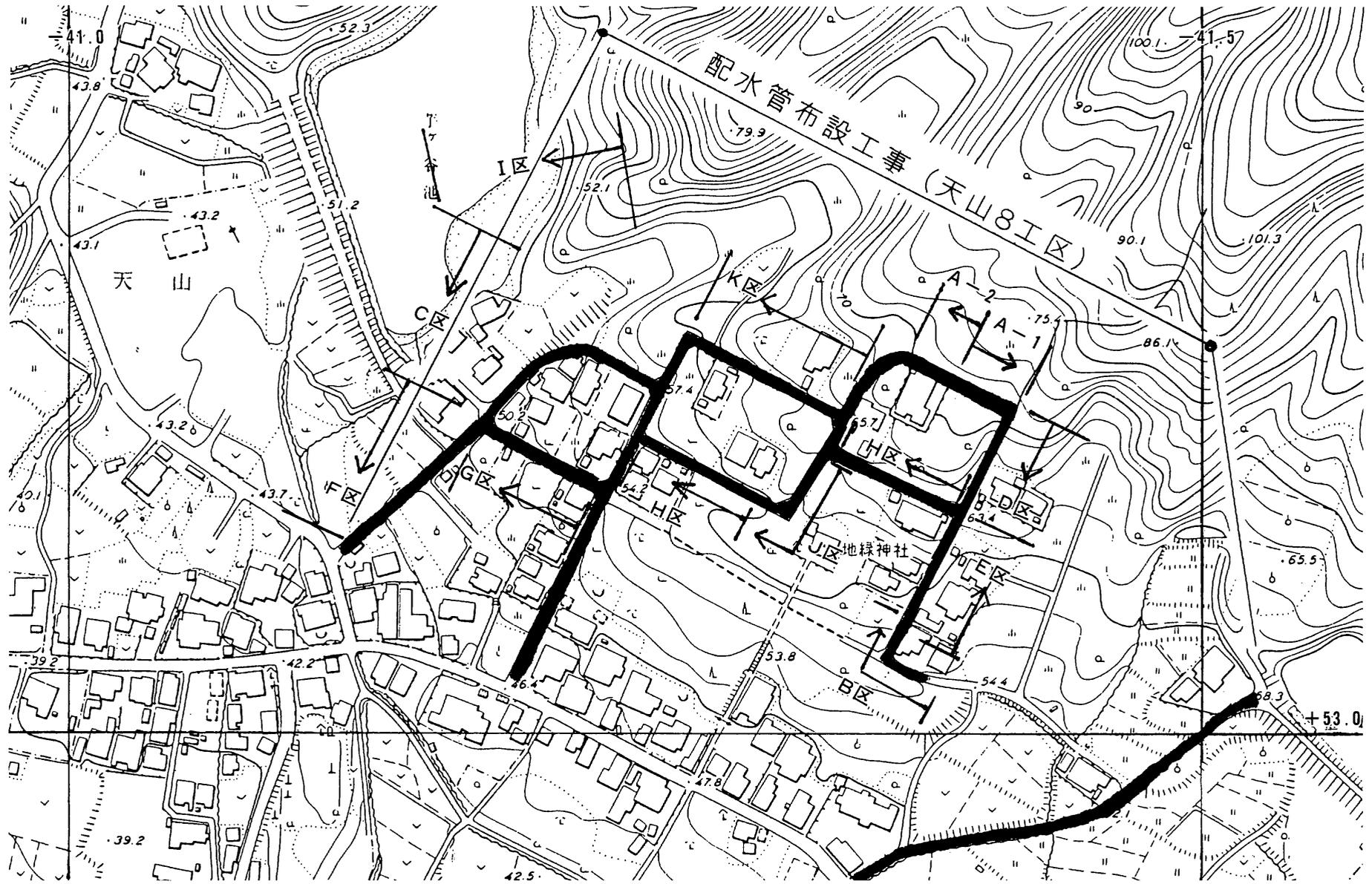


Fig. 6 平成9年度事前調査範囲図 (S1/2,500)

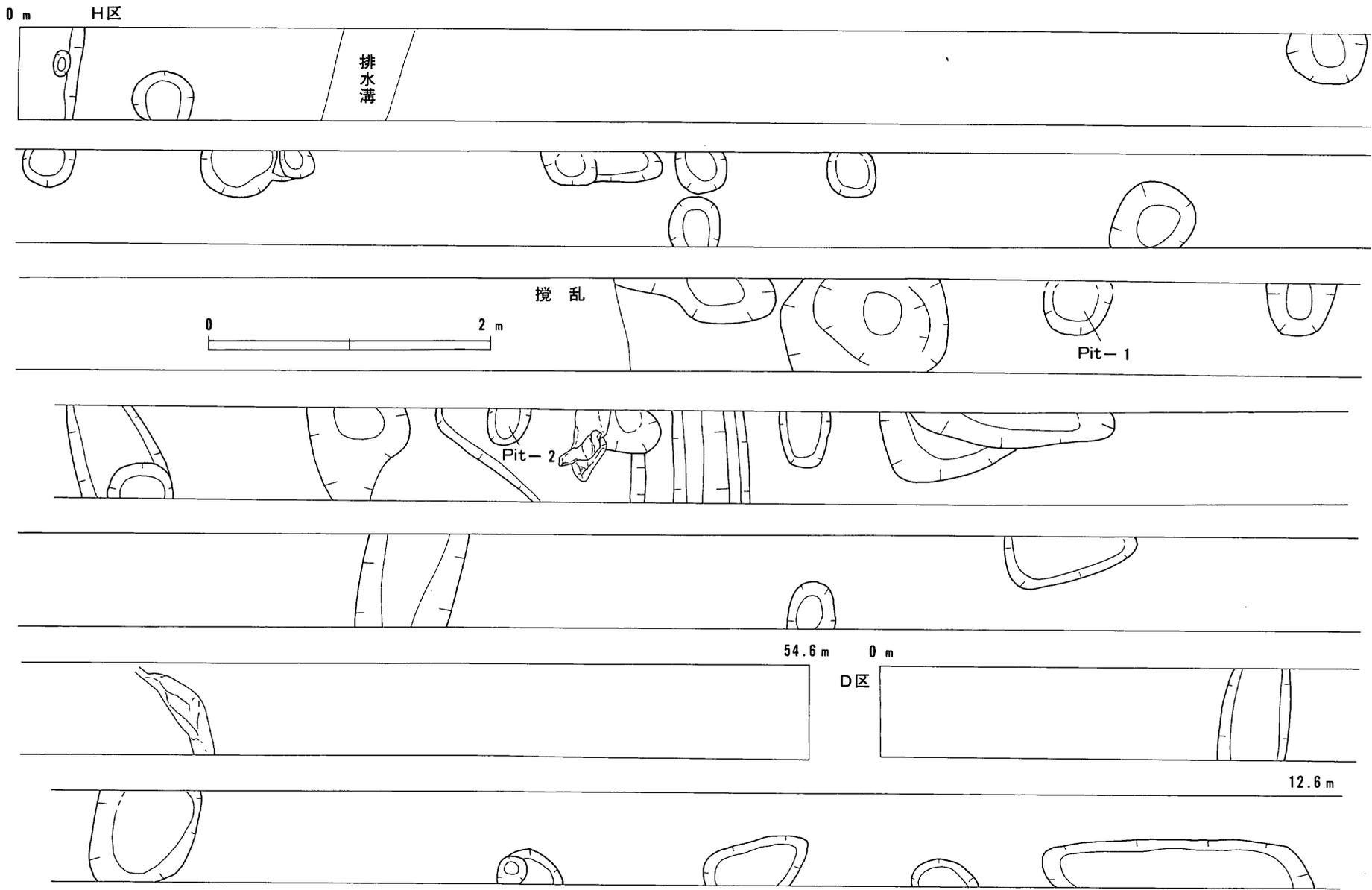


Fig. 7 H・D区間遺構配置図 (S1/40)

## 平成9年度の概要

平成9年度は、配水管付設工事に先行し対象地をA～K区に分割し調査を実施した。

調査対象区の全域は宮地岳から派生した標高51～70mの丘陵部に位置し、南向きで非常に緩やかな傾斜をもつ。宮地岳から派生する西麓の急斜面の丘陵部とは違う景観をもっている。

昭和45年地元の尾中氏から土器が出土したとの報告があり、当時確認した層序は表土の下に黒ボク層、その下に黒色粘質土、下は基盤の礫層の地山で、この黒ボク層から土器が出土している。

A～K区域内の基本層序は、道路路床直下に火山灰質の黒色粘質土その下に地山が検出されるものを主体とする。前述のように縄文時代早期の押型文土器の出土する区域は、黒ボク層が存在する場合であり、総体的に縄文時代の遺構や遺物の検出は難しいと考えられた。

A-1・2区の層序は基本層をなし、縄文時代早期の土器が出土した隣接地に位置する。

A-1区では礫層に掘り込まれたピットや溝状遺構が検出できたが非常に浅く、縄文時代に伴うと考えられる遺構や時期は明確にならなかった。またA-1区で調査開始後、古墳の石室が検出されたため配水管の位置の変更を協議したが現状保存は不可能と判断し、B～K区の調査完了後に古墳の本調査を実施することとした。

A-2区でもピットや土坑などの遺構が検出できたが、遺物はなく時期は明確にならなかった。

B区でもA区と同様な基本層序を呈していたが、ここでは基盤の礫層までに掘り込まれた遺構は全く確認することはできなかった。

C区の層序も基本層序に一致する。ここでは旧地形に小谷があるため谷頭の段落ち部分と丘陵縁辺部が確認された。しかし丘陵縁辺部の削平は著しいため遺構であるピットや土坑状のものは非常に浅く、遺物の出土もなく、時期はやはり不明である。

D区では、ピットや溝状遺構と性格不明の遺構を検出した。それは床面に極端な高低差があり、20～30cm程の石を伴う土坑状のもので、その埋土からは須恵器の大甕の口縁部や土師器の破片などが出土した。先に確認した古墳の南東部にあって周辺に古墳群が形成されていたと想定すると、古墳が所在してもいい位置関係と考えられる。しかし幅70cmのトレンチ調査のため、これ以上の追認調査はできなかったが、古墳が所在した可能性は残る。

E区においてもピットや溝状遺構や石を伴う遺構が確認された。遺構に伴う遺物は出土せず、やはり時期決定はできない。しかしながら周辺にも古墳が所在した可能性は残る。

F区は旧地形が谷頭にあたる所で、丘陵部を削った土が客土として積まれていて遺構や遺物は確認できなかった。

G区でも土層は基本層序を呈し、ピットや土坑状の遺構を検出したが遺物の出土がなく時期は確認できなかった。ここも遺構自体はそう深くない。

H区の周辺の景観は旧地形が残り、付近には古墳の石材として使用可能な転石が多く存在する。このために古墳の所在する可能性を想定したが、ピットや土坑が検出されただけで古墳に関連した遺構や遺物など確認はできなかった。

I区やK区の層序も地山の上に黒色粘質土がある基本層序をなす。遺構の検出される密度はA・D・G・H区に比べると密度は薄くなる。ピットや土坑状のものを検出したが、遺物はなく、これらの時期も確定はできなかった。



A-2区



A-2区



D区



G区



H区

各区現況写真

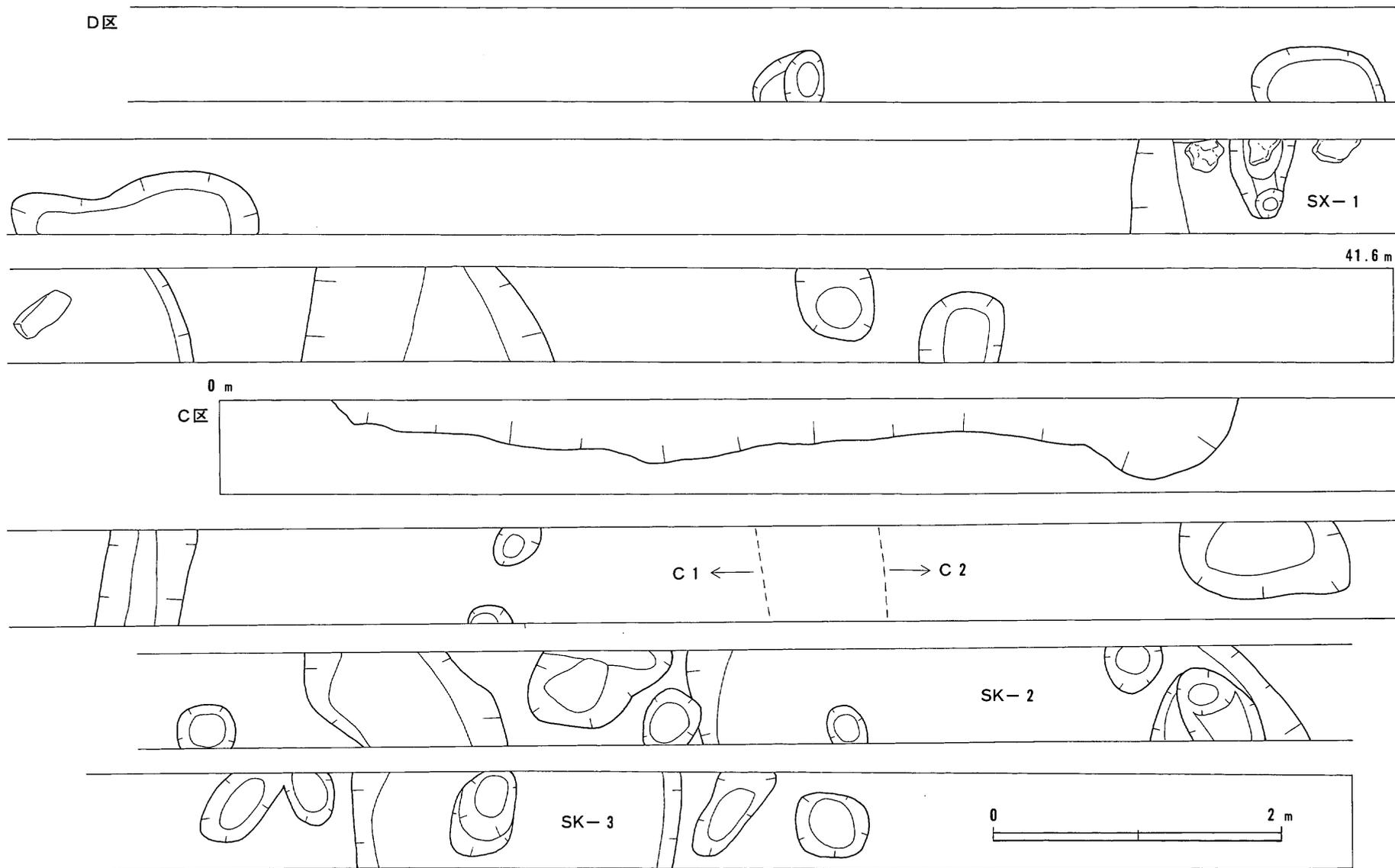


Fig. 8 C・D区間遺構配置図 (S1/40)

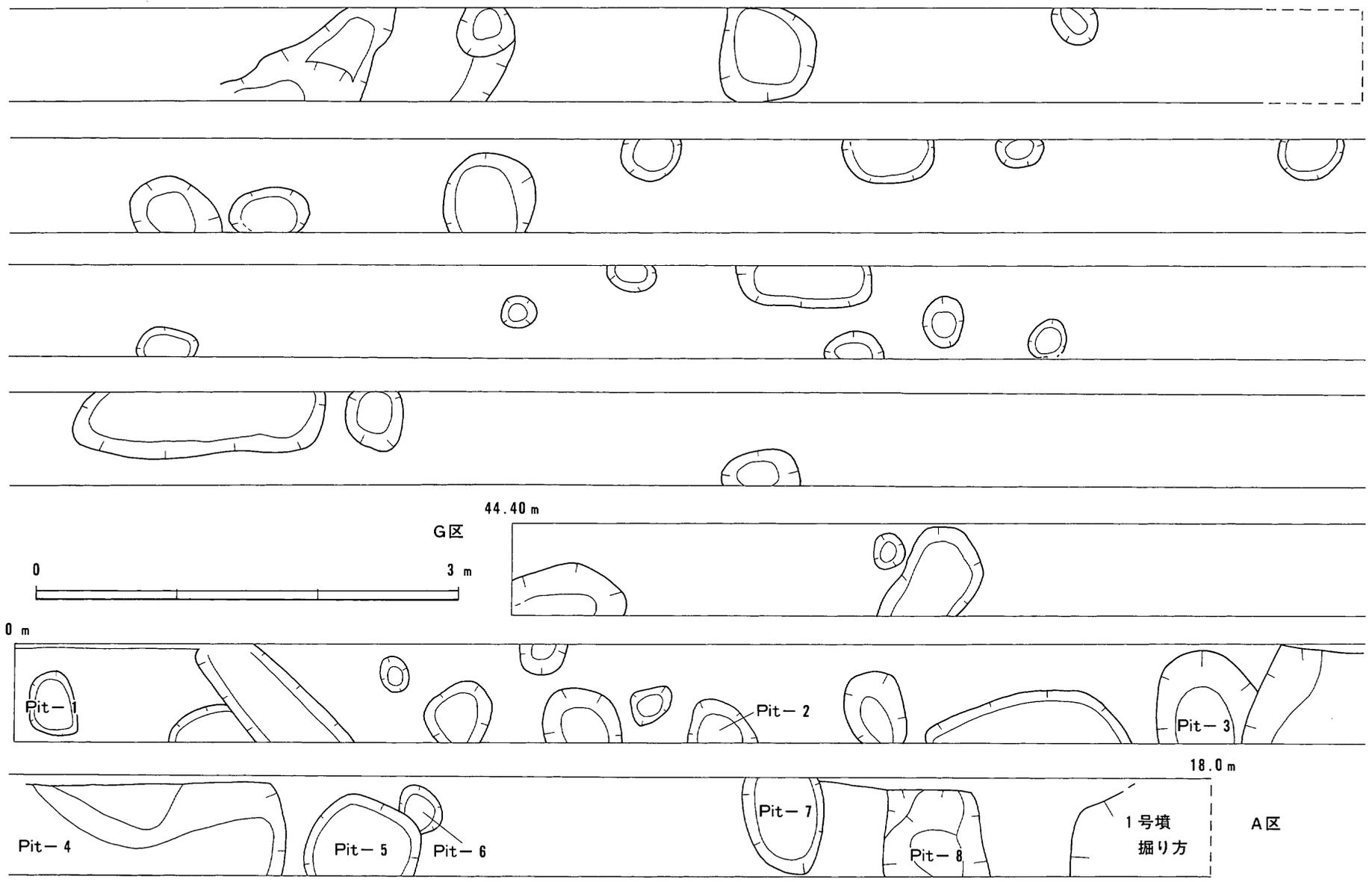
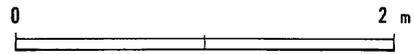


Fig. 9 G・A区間遺構配置図 (S1/40)

A-2区

0 m



20.0 m

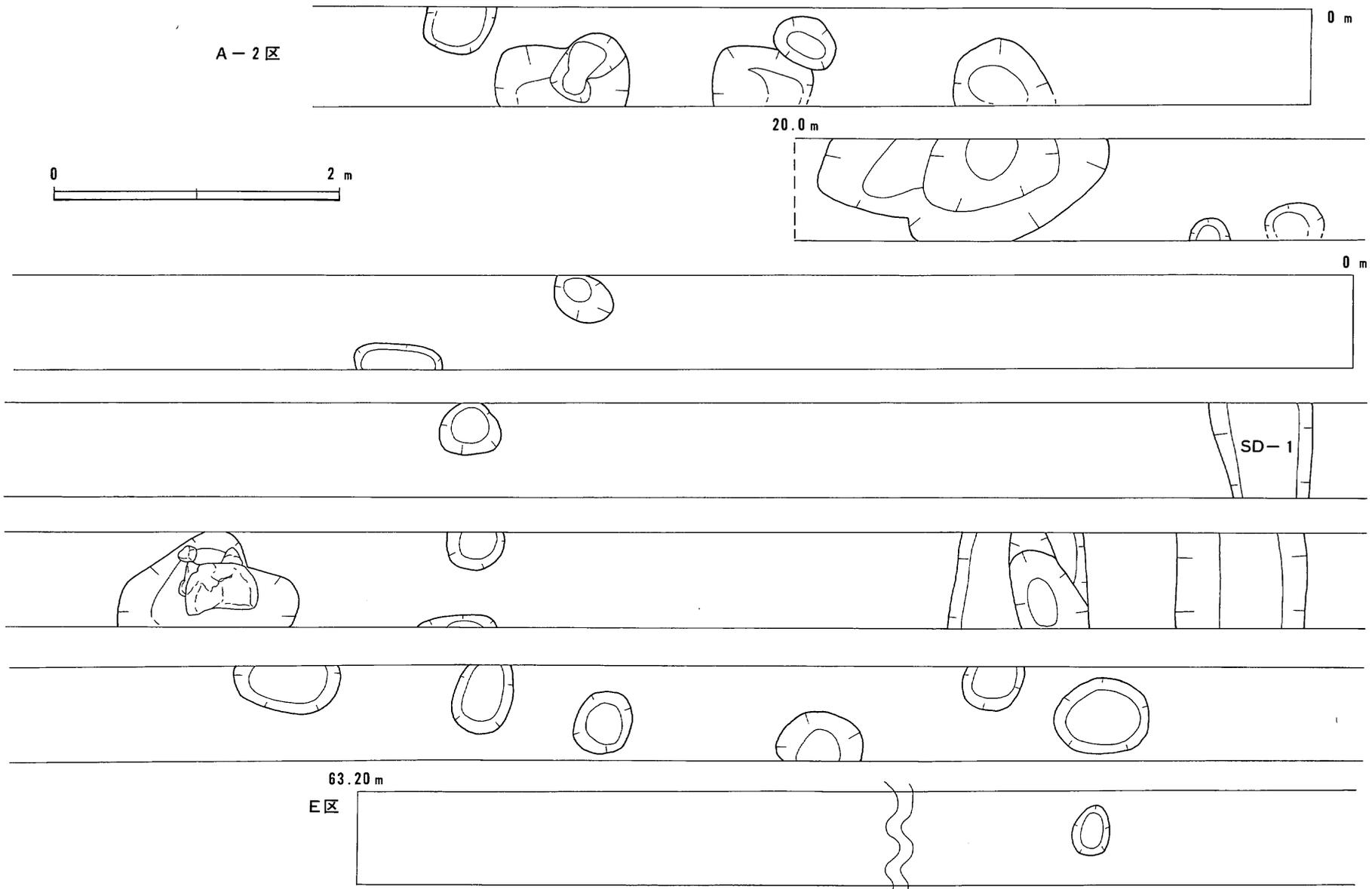
0 m

SD-1

63.20 m

E区

Fig. 10 A・E区間遺構配置図 (S1/40)



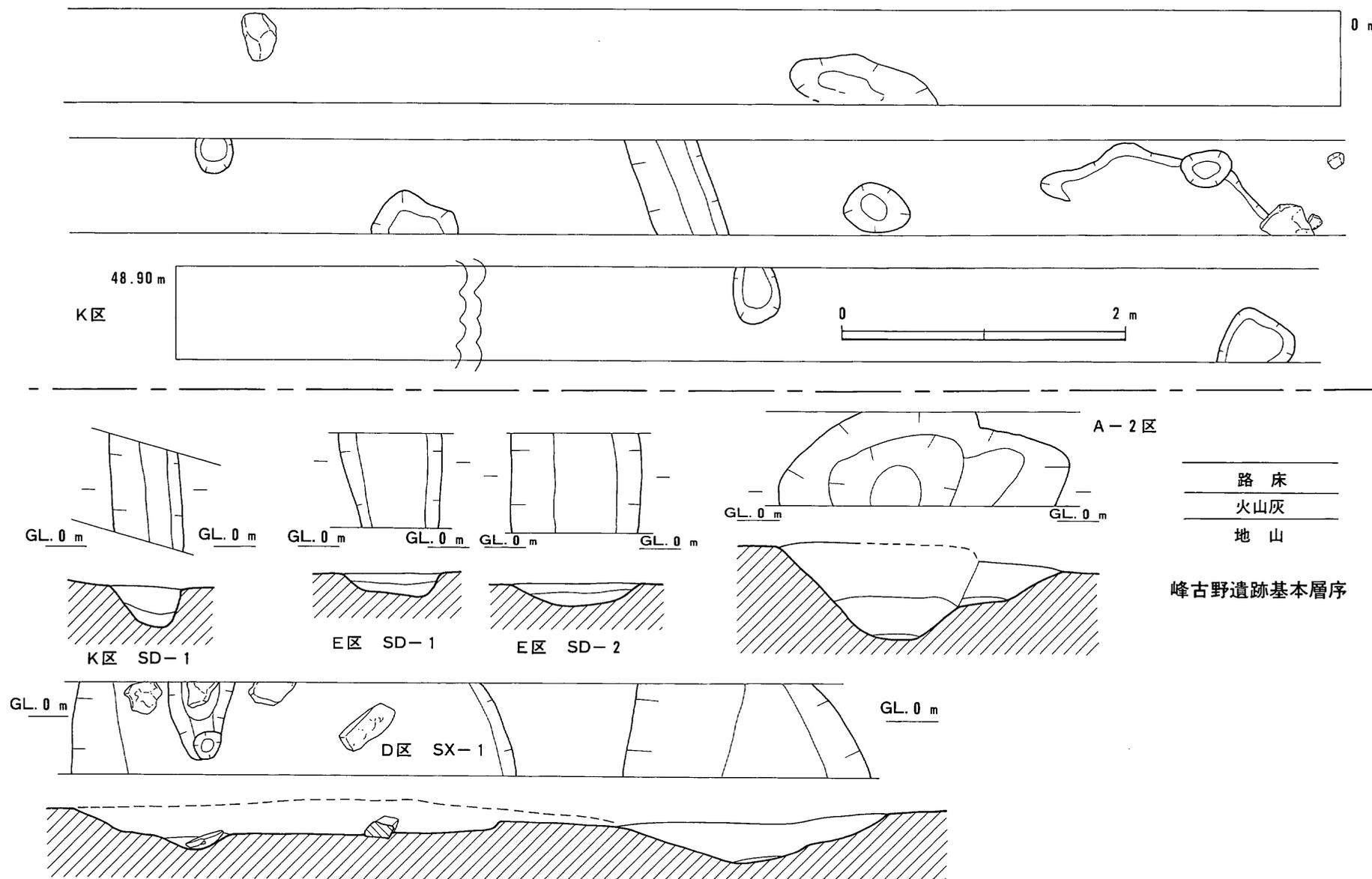
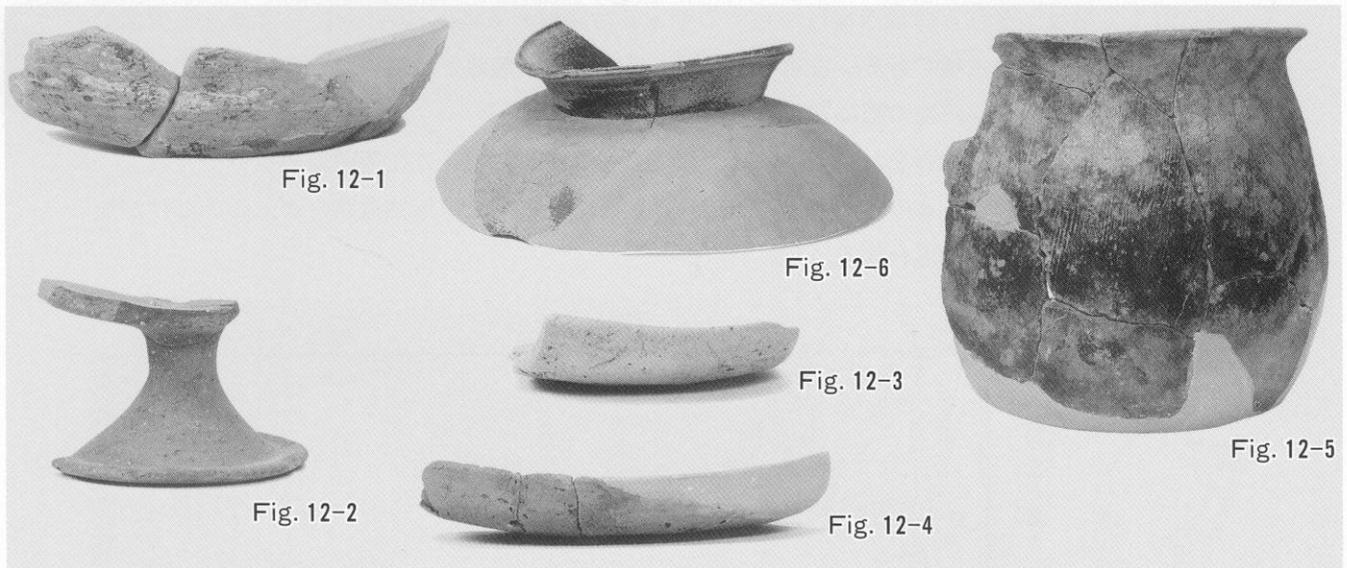


Fig. 11 K区間遺構配置図および遺構断面図 (S1/40)

## 出土遺物 (Fig. 12, PL. 2)

1～6の図示した遺物は、D区間の性格不明遺構(SX-1)から出土した。

2は高坏の脚部片で坏部を欠損している。裾部径7.4cm、残存高5.05cmを測り、胎土は砂粒が多く含まれるが焼成は良好。3・4は土師器の坏。3は焼成良好で、内面はナデ、外面にはケズリ、部分的にナデ仕上げである。4は内外面ともに摩耗が著しく調整は不明。5は焼成良好な甕で、最大径が口縁部と胴部中位にある。復元口径18.5cm、残存高17.2cmを測る。6は全体的に歪みが大きな中型の甕で口縁部から肩部だけが出土した。復元口径23.5cm、残存高12.65cmを測る。



## PL. 2 出土遺物

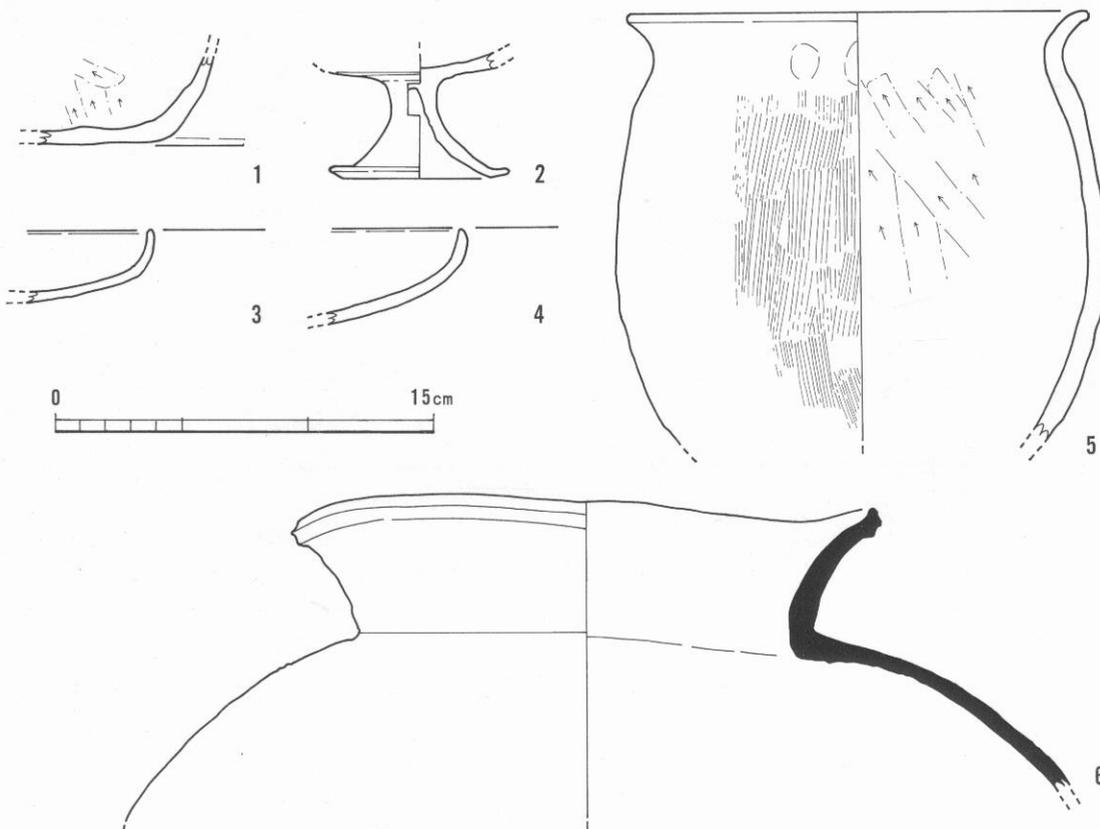


Fig. 12 出土遺物実測図 (S1/3)

## 5. 峰古野1号墳の位置と環境

峰古野1号墳は筑紫野市大字天山に所在する。

筑紫野市東部にあたるこの付近には、筑後川の支流である宝満川が流れる。宝満川の両岸には、肥沃な沖積平野を形成し、数多くの遺跡の所在することでも知られている。

古墳の位置する宮地岳（標高338.9m）は、この宝満川の中流域の東側であって西麓には多くの古墳が群集し各々の古墳群を形成している。

峰古野1号墳は、それらの最西端に所在する芋ヶ谷古墳群の東南0.7kmに所在し宮地岳南麓部では、初めて発見された古墳である。古墳の所在する丘陵部は西麓部とは違い、非常に緩やかな傾斜となっていて、その緩傾斜地の標高70~73mに位置する。

周辺域は昭和45年に旧地形をわずかにのこした荒造成がなされ現在月光苑団地となっている。

古墳は団地の北端の幅2mの道路直下25cmで検出された。隣接地は舗装道路だが、ここだけが無舗装のため古墳が残ったと思われる。

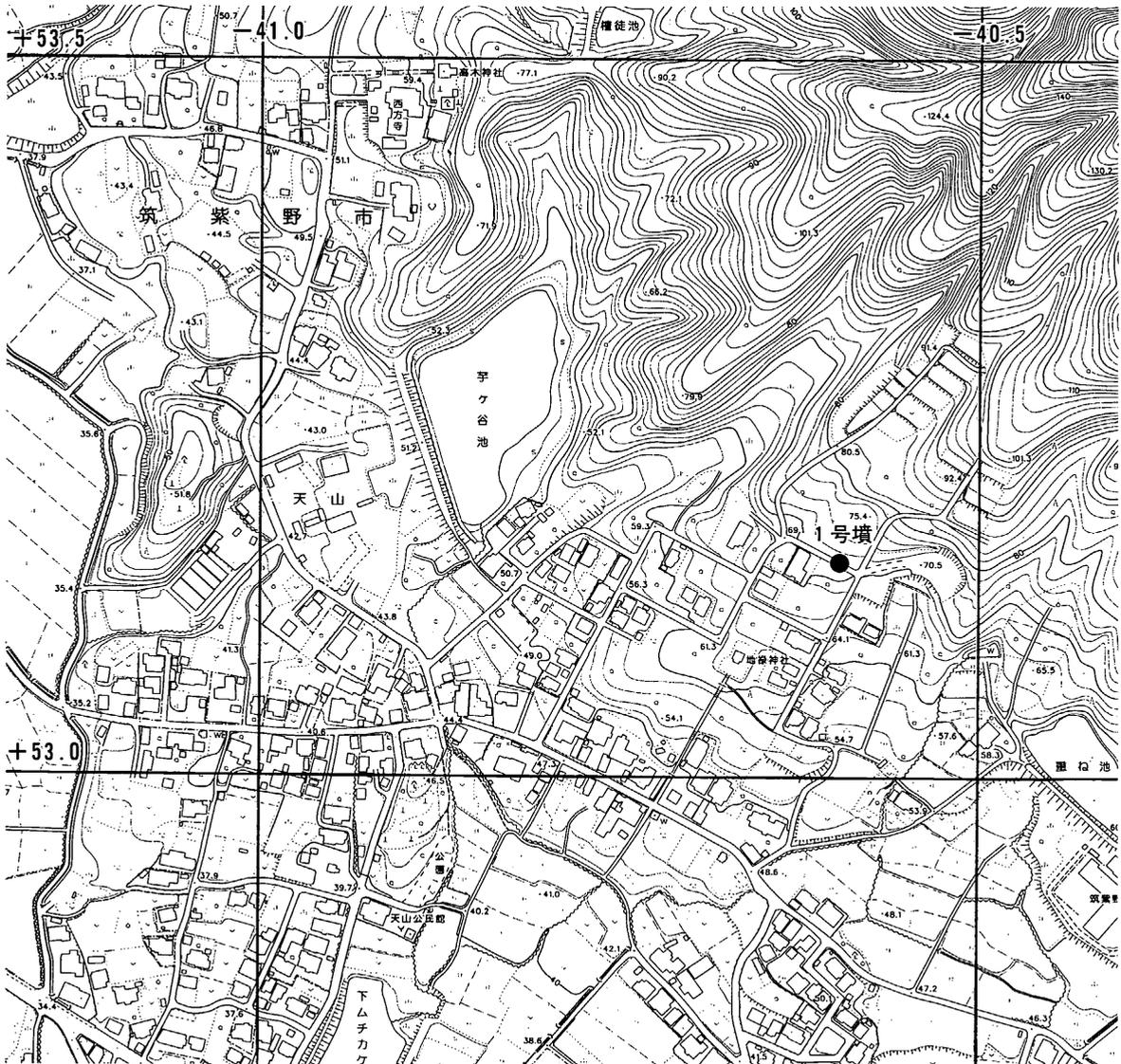
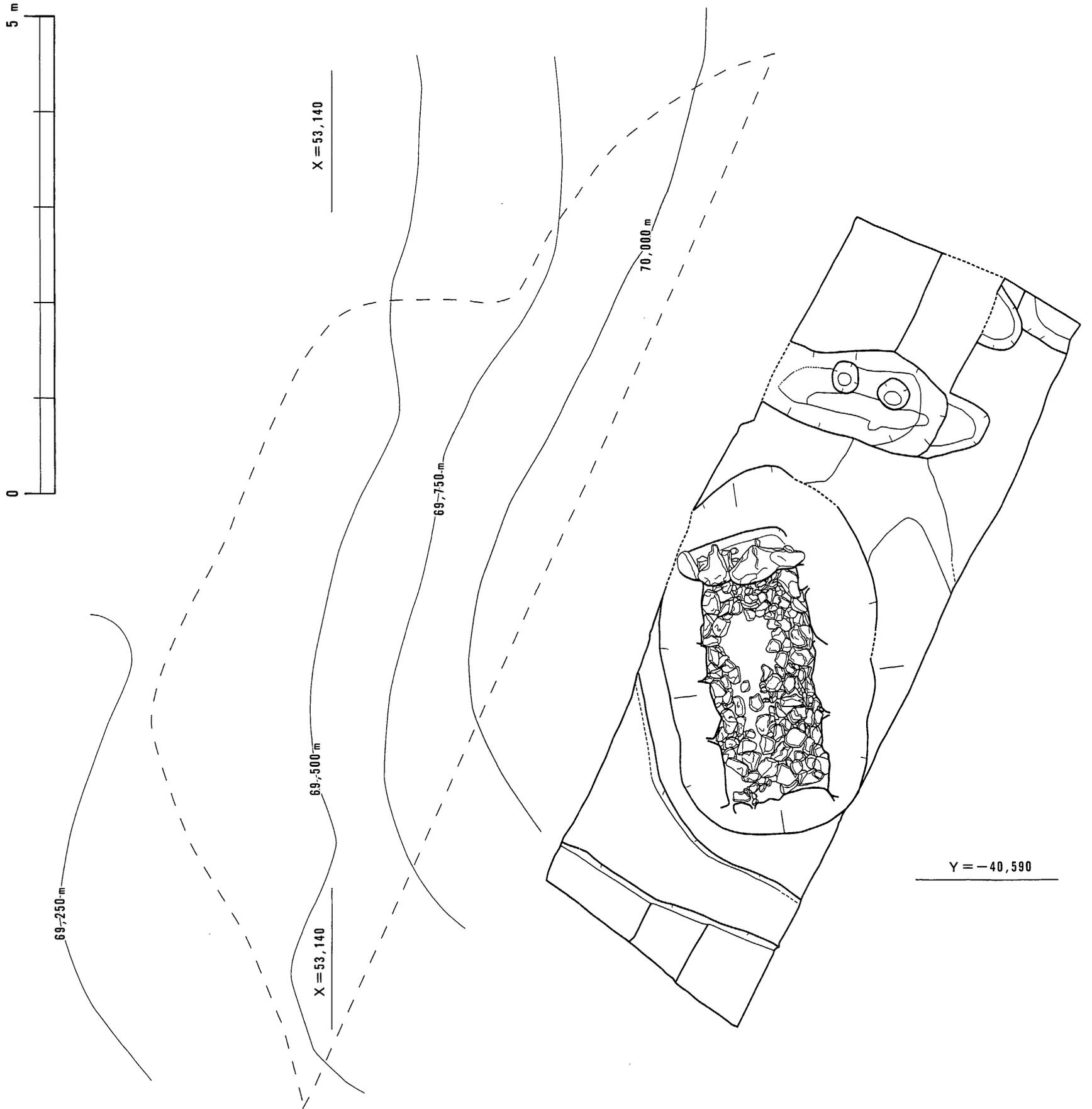


Fig. 13 峰古野1号墳位置図 (S1/5,000)

Y = -40,600

Y = -40,600



Y = -40,590

Y = -40,590

Fig. 14 1号墳現況図 (S1/50)



西から



北から

## 位置と現状

1号墳は宮地岳から派生したヤツデ状の南向きの緩斜面の尾根線上のほぼ中央付近に位置し、標高70～73mを測り、現状は道路となっていた。荒造成されたときに天井石や墳丘は失われた可能性が考えられる。調査の結果、小規模な竪穴系横口式石室をもつ古墳が検出された。

## 墳丘

緩斜面に構築されて道路になっている部分の墳丘積み土は造成により、すべて失われている。ただ古墳の所在する南側には、わずかに旧地形をとどめた一画があり、ここを精査すると明確ではないが地形変換線を確認することができる。この地形変換線より石室の中心部までの距離は5ないし6mを測り、墳形を考えると地形変換線は円墳というより、やや角張った部分も見うけられるが、この一画も荒造成の影響があったと考えられるため、標高69.5mのラインまでを墳裾とした。

その判断から古墳の規模は、直径10m前後の円墳である可能性が推定される。

南側の一画は未調査区だが、古墳の腰石の上端から20～30cmの高さの表土を残していることから、ここには僅かに墳丘積み土の遺存している可能性が、考えられる。

また周辺は、掘削が著しいため溝らしいものは検出できなかったが、おそらく山側に地形と古墳を区別するために馬蹄状の周溝を作っていた可能性はある。

## 地山整形

前述のように石室付近は、旧地形を全くとどめてはいない。しかしながら道路を挟んだ南北の区画にはわずかに旧地形が残り、これらから主体部は等高線にやや平行して構築されていることが理解される。また北側の旧地形が、主体部掘り方から1.2m前後の高低差があることを考慮すると、主体部北側は、標高73m前後の所を標高70.5m前後に掘り下げて地山整形し、平坦面を作り、主体部掘り方の上端部として基底面を形成したものと思われる。

## 石室

開口主軸をN-2°-Wにとる竪穴系横口式石室を内部主体とする。

石室の掘り方は、礫層混じりの地山を長さ3.3m、幅2.2mの変形の長方形のプランに掘り込んだもので平坦な底面を形成している。

さらに掘り方の内側に近い位置に20cm程度の深さの掘り方を溝状に掘っている。このため設置された腰石は全体的に掘り方の壁ギリギリに接しているが、掘り方の左壁側の一部だけが歪んで広がっている。また敷石側の底面は、溝状の掘り方より一段高く整形され、平坦に作られている。

石室は、奥壁幅1.4m、前幅1.1m、左壁長2.2m、右壁長2.18mを測る長方形プランを呈する。

側壁の遺存状況は、左右両壁ともにほとんど腰石だけである。

壁体の構成は、腰石に未加工の60～80cmの長方形に近い転石を横位にして左壁側は三石、右壁側は四石使用し、腰石の上端をそろえている。ただ右壁側の框石より奥壁側の二石目だけが腰石の高さが低いため幅30cm、厚み20cmの石を二石目として使用し、腰石全体の上端とのバランスをとっている。また腰石は、僅かに内傾する。

各々の腰石間の隙間には小ぶりの石材はほとんど充填されず、大きな腰石だけで形成されている。

奥壁は、側壁と同様に腰石だけしか遺存していず、二石の石で奥壁は構築される。これは側壁と同様な大きさの石一石を横位にして使用し、その右側にそれより小さめの石を用いている。この石は、腰石全体の上端部より、高さがやや低いため上に二石目をのせて腰石のバランスをとっていた

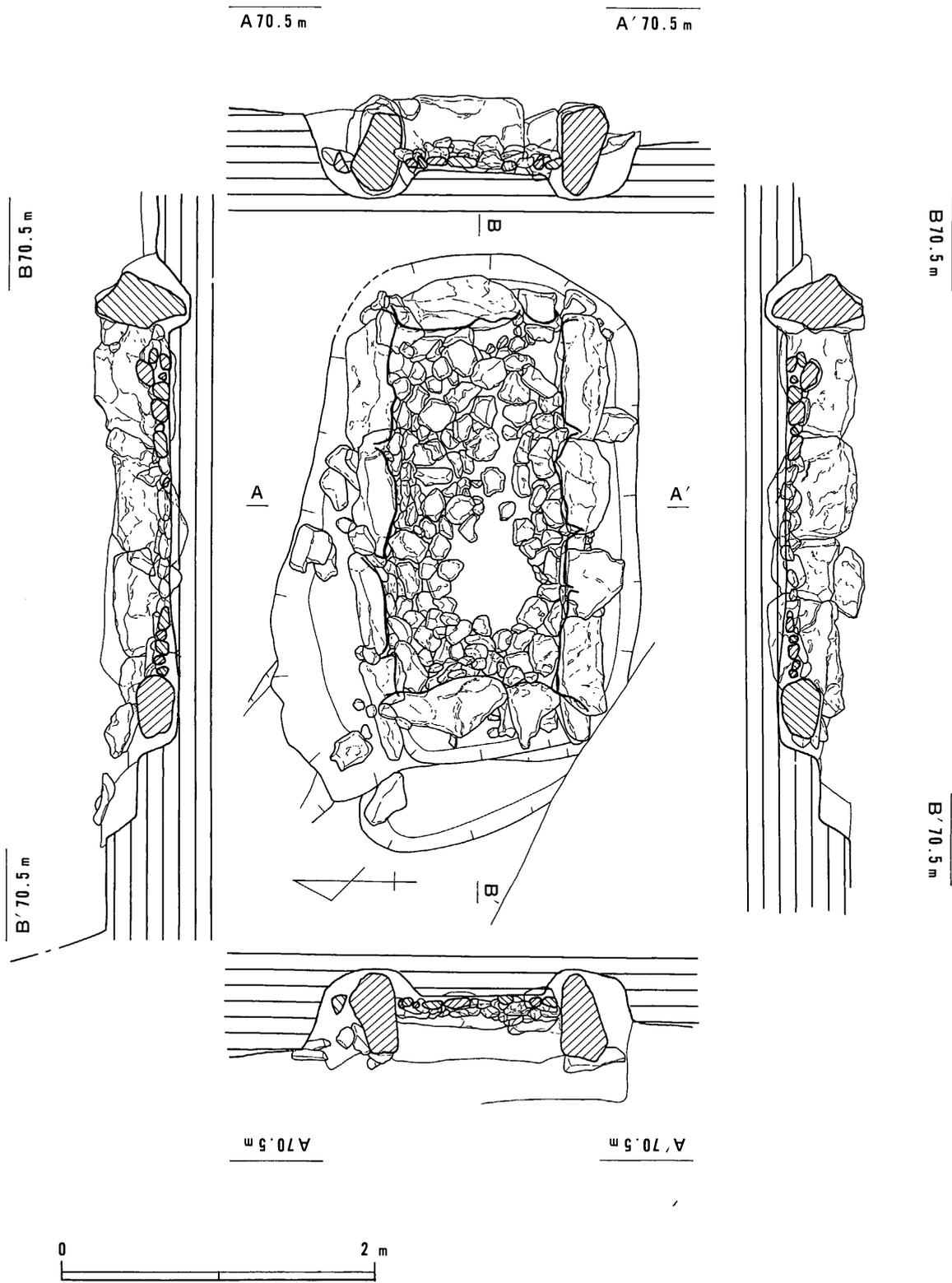


Fig. 15 1号墳実測図 (S1/40)

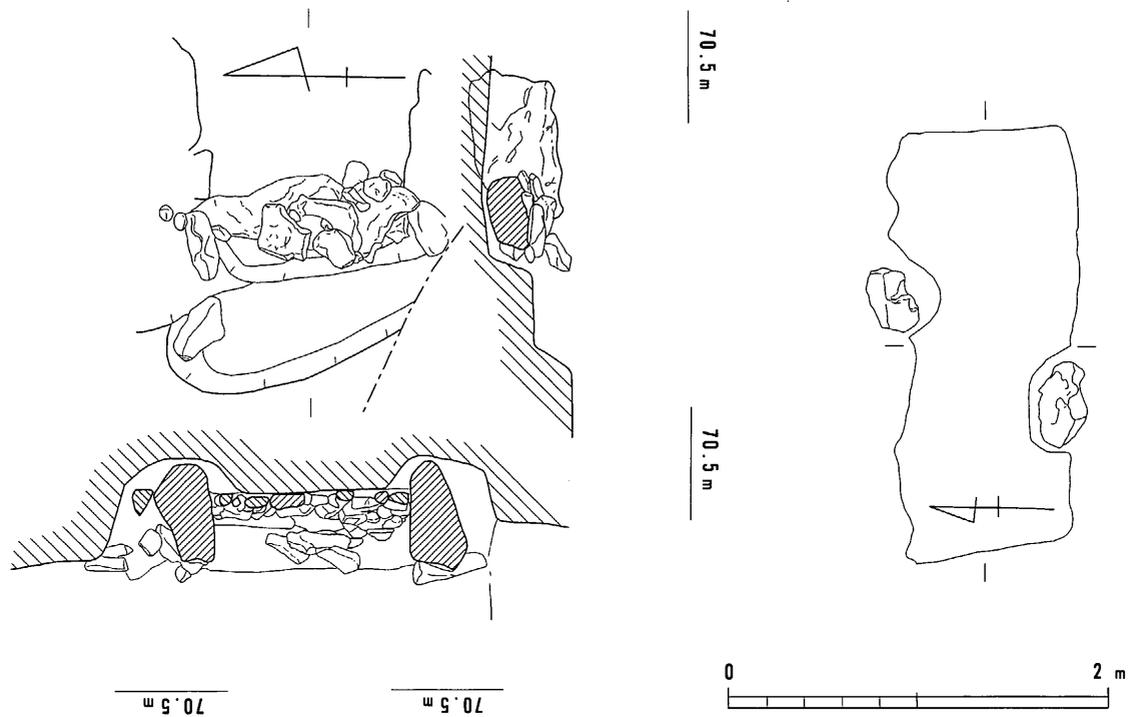


Fig. 16 閉塞部および石室内面掘方図 (S1/40)

ものと考えられる。これら二石間には、他の側壁と同様に小ぶりの石や粘土が充填されることはない。

内側の掘り方を見ると両側壁に一石ずつ腰石を安定させるための長さ30～50cm、幅20cmの偏平な根締石が配置されるが、粘土などの充填はない。

敷石は平坦な掘り方の底面に直接置かれ、粘土などの充填はなされていない。

敷石には20cm程度の大きさの偏平な転石を使用し、面を揃えている。これは部分的に失われているが、全面に敷きつめられていたものと思われる。

両側壁は、袖石を配置することなく横口部に接する。

横口部には、奥壁や側壁と同じ大きさの長さ80cm、厚み20cm、最大幅40cmの石と長さ40cm、厚み20cm、最大幅40cmの二石が用いられるが、腰石と同じ様に横位に設置されていず、高さも腰石とは上端が揃わない。これらは平坦に置かれている。このことからこれらを框石と考えた。

框石は、床石よりわずかに高く設置されている。

また框石より外部は石室掘り方とは別に、不整長方形ぎみの掘り方で地山を掘り下げていて、この掘り込みの高さと框石の高さの上端は、一致をみせる。

左框石の上に小ぶりの石が配置される。これは側壁の延長ライン状に存在するが、墓坑掘り込み部に接して置かれ、框石や床石より高い位置にある。

また框石より外部にも掘り方の上端に接するように小ぶりの石を置く。これらは側壁の延長ラインではなく、ハの字状に配置されている。今回の調査では、右框石の外部は未調査区になるため確認はできなかったが、おそらく左壁側と同様な構造をしていたと考えられる。

### 閉塞部

框石の中央付近の上部に僅かに残る。小ぶりの転石が二石ずつ積まれていて、現状では腰石の上端とほぼ同じレベルを保っている。上部の石が一部動いているが、框石のすぐ上の石は築造時のままであると思われる。これらの石の隙間には粘土などの補填は認められないが、小礫などが充填されて、これで高さなどのバランスを取っていたと考えることができる。



石室近景 (西から)



閉塞部近景 (西から)



床面および閉塞部近景 (北から)



閉塞部近景 (北から)

PL. 4 石室近景



床石・閉塞石除去後石室近景（西から）



框石近景（西から）



右奥壁および床石近景



左奥壁および床石近景

PL. 5 石室近景



右腰石および床石近景



右奥壁内面掘方近景



右腰石内面掘方近景



框石近景（石室側から）

PL. 6 石室近景

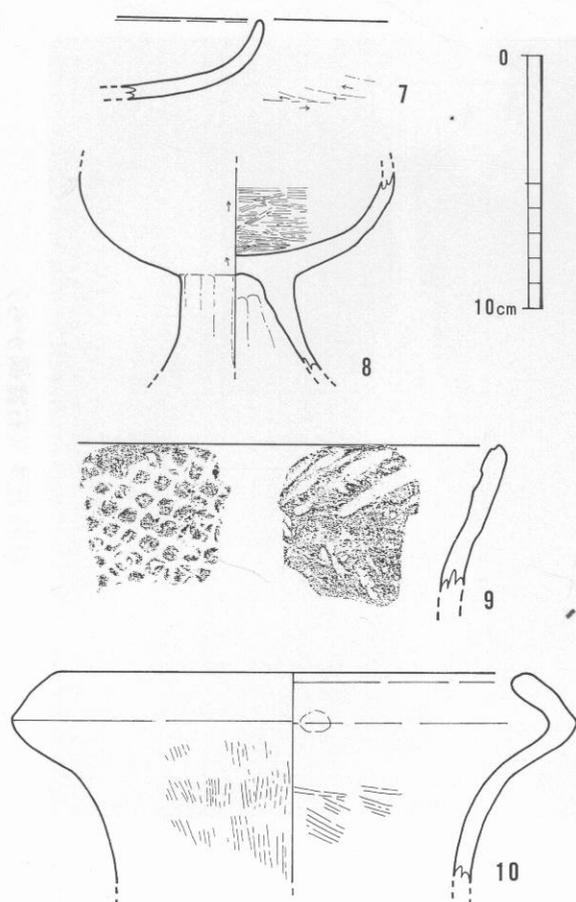


Fig. 17 出土遺物実測図 (S=1/3)

## 出土遺物

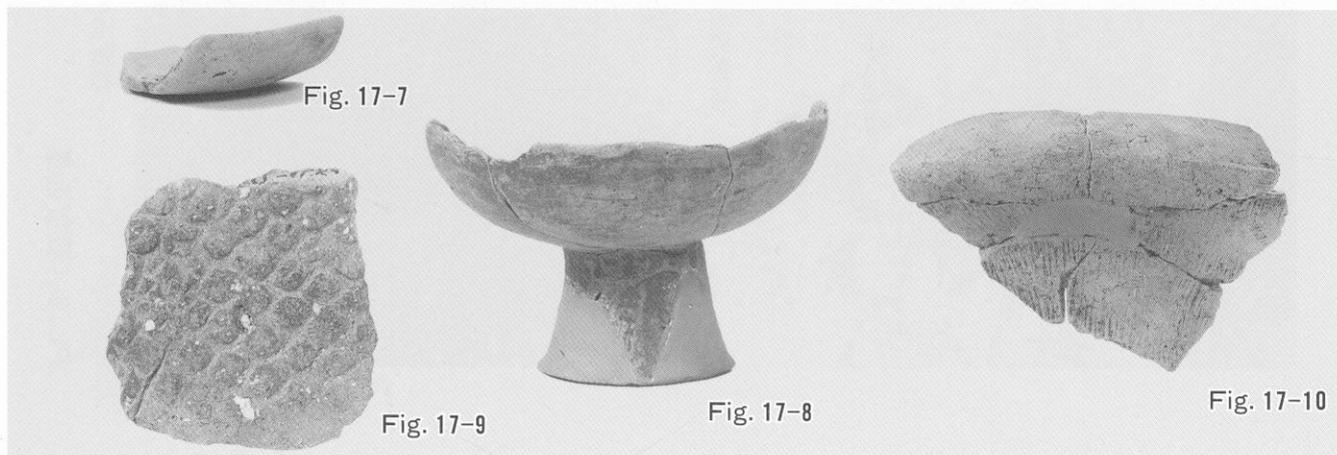
石室内や掘り方・閉塞石の間からも遺物は、全く出土しなかった。

図示した遺物は、古墳の周辺の遺構から直接古墳に伴うものとは考え難い。

7は土師器の坏の破片で内面はナデ、外面はケズリが大半だが、部分的に後でナデで仕上げで、焼成は良好。8は土師器の高坏、口唇部と脚部の裾部が欠損しているが、焼成は良好、胎土はわりに精製されていて、表面に丹塗りの痕跡をウッラのこす。内面の調整はミガキ、外面はケズリ後ミガキが施される。9は縄文の深鉢の口縁部で外面にやや大きめの楕円形の押型文を残す。早期の田村式のものと考えられる。10は袋状口縁壺の口縁部の破片で、復元口径18.4 cmを測る。口縁部から頸部の破片で残存高8.4 cmで、胎土に0.5~3 mmの砂粒と角閃石を含んで焼成は良好。内外面はハケメ、口縁部は、ヨコナデ調整で仕上げている。

## 6. まとめ

本古墳は丘陵尾根線上に立地する古墳で、内部主体は竪穴系横口式石室である。調査の結果削平を受けているが小規模の円墳の可能性が考えられる。周辺に古墳が所在する可能性を残すが、同種の主体部であったかどうかは現状では不明である。構造から考慮すると奥壁や側壁の三壁には、腰石を用いて袖石はなく、小口部には腰石は使用せず框石を床石と同じレベルに配置。框石の上には板状の閉塞石はなく、割石を横に積み上げた手法で、横口部は框石より一段高く設定され、その壁際には貼石状に石を積み上げて羨道状の側壁を設けている。この古墳の造営は、古い様相を残しながらも新しい様相を示すことが特徴としてあげられる。ただ出土した遺物もなく時期の推定は困難だが柳沢氏の石室分類ⅢB期B2型の範疇にはいり6世紀前半代のものとしておきたい。



PL. 7 出土遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みねこのいちごうふん							
書名	峰古野1号墳							
副書名	配水管布設工事に伴う発掘調査							
巻次	第70集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	渡邊和子							
編集機関	筑紫野市教育委員会（文化課 文化財担当）							
所在地	〒818-8686 筑紫野市大字二日市西1-1-1 TEL 092-923-1111(代)							
発行年月日	西暦2002年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みねこのいちごうふん 峰古野1号墳 みねこのいせき 峰古野遺跡	ちくしのし 筑紫野市	176	253	33度	130度	940601	490.46 m <sup>2</sup>	配水管 布設
			315	28分 42秒	33分 47秒	940630		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
峰古野1号墳 峰古野遺跡	古墳 集落	古墳	竪穴系横口式石室 溝状遺構 (SD) Pit 土坑 (SK) 性格不明遺構 (SX)	須恵器 土師器 縄文土器				

みねこの  
峰古野1号墳

配水管布設工事に伴う発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第70集

平成14年1月31日

発行 筑紫野市教育委員会

〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市西1-1-1

TEL 092-923-1111(代)

FAX 092-923-9644

印刷 大同印刷株式会社

〒840-0815 佐賀市天神一丁目1番32号

TEL 0952-24-8450(代)

FAX 0952-28-5583

URL <http://www.daidou-jp.com>.